

多元文化論講座

- (1) 講義名：多元比較表象論 a
- (2) 副題：印刷術の誕生と文化革命
- (3) 担当教員：鈴木繁夫
- (4) 開講時限：金曜 2 限
- (5) 教室：文総 623
- (6) 目的・ねらい：

「未来はバックミラーのなかにある」(マーシャル・マクルーハン) という言葉がある。どのような事象も歴史的に把握しないと、事象の外貌にとらわれ事象の実態を見誤り、事象を自分で的確に意味づけることを忘れ、不適切な対処することになってしまう。

前期 (A) は、メディア革命という視点から、16-17 世紀の印刷術 (紙を媒体とした活版印刷) の興隆によって生じた文化革命について考察し、21 世紀の Web2.0 状況を再考する。

後期 (B) においては、メディア革命によって生じた世界観の変化のうち、自然の中に散逸している「驚異」的な物事に人間の「好奇心」が触発されて、人間の視野が広がる一方で、自国宗教文化規範の優越性を再認するといったよじれた方向に展開したことを学ぶ。

- (7) 履修条件等：

前期授業 A と後期授業 B を続けて履修することが望ましい。

- (8) 講義内容：

〔概要〕

インターネットは、今の多くの私たちにとっては、公的には場所と時間の制約からできるだけ自由になって共同作業を行っていくための道具であり、私的には好縁を育成し強固なものにしていくための手段という理解されている。こうした意思疎通メディアへの考え方は、21 世紀に特異なものではなく、西洋では 16-17 世紀にすでに確立していた。この考え方の確立は、千数百年続いた筆耕と羊皮紙を介して修道院・大学図書館をインフラとする、顔が見える対面情報伝達文化に取って代わった。こうした歴史的視野に立つと、現に私たちが経験し実際に抱いているメディア観、それに付随する文化のあり方も異なって見えてくる。そしてその次に待ちかまえているのは、では自分はどう考えるかにかかってくる。なぜなら現実の心情としては、発信者のわからない情報の波に呑まれているよりも中世的な小さなまとまりの空間のなかで互いに気心が知れている (と思い込んでいるか、そう思い込みたい) 共同性に賛成だが、それに積極的に賛成することには、当為必然が含意されていないからだ。

授業では、エリザベス・アイゼンステイン『印刷革命』(原題 *The Printing Press as an Agent of Change*) に沿って議論を展開しながら、こうした図式が成り立っている歴史的

背景をさぐっていきます。

なおアイゼンシュタインは、歴史を記述する際には、いつも暗黙の内に現代の人間観が肯定されており、「価値中立的な語法」（ロラン・バルト）による「いま・ここ・私」に向かって進む歴史として要領よくまとめている。フーコーの「人間の終焉」や「知の考古学」という視点はまったくくない。その意味でとてもおとなしい歴史叙述書になっているので、批判的に読むことが要求される。

〔授業方法および計画〕

授業は講義とはいっても、ともに対話しながら考えていく形式で授業を進めていく。また講義の約3回ごとに内容理解を試す小テストを行う。課題へのレポート提出を最低二度行う。

講義の内容は以下の順にそっていく。

1. 未確認の「文化革命」とその特徴
2. 印刷術から捉えたルネッサンスの二段階
3. 聖書釈義を変える印刷術と宗教改革
4. 印刷術を介する<自然という書物>と<知識共同体>
5. コペルニクス革命の背後にある印刷術
6. 印刷術が変えた聖書と自然

(7) 成績評価の方法：

評成績の評価は以下の基準にしたがって行う。授業出席（30%）、授業参加（35%）、小テスト・課題レポート（35%）。

(10) 教科書：

・Elizabeth L. Eisenstein. *The Printing Press as an Agent of Change: Communications and Cultural Transformations in Early-Modern Europe Volumes I and II*. Cambridge University Press, 1982.

・エリザベス・アイゼンシュタイン『印刷革命』（小川昭子 [ほか] 共訳、みすず書房、1987年）[原著の抄訳]

(11) 参考書：

・ジャン＝ジル・モンフロワ『消えた印刷職人：活字文化の揺籃期を生き抜いた男の生涯』宮下志朗訳、晶文社、1995年

・香内三郎『活字文化の誕生』晶文社、1982年

・W. J. オング『声の文化と文字の文化』桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳、藤原書店、1991年

(12) 注意事項：

1)教科書・参考書は自分で購入すること。

2)この講義のさらに細かい内容は以下のサイトにアクセスすること（2011年4月10日以降）。<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~ssuzuki/ClassLecture/GraduateLecture.htm>

3)聴講は自由ですが、聴講生もかならず小テストを受け、課題レポートを提出して下さい。

4) オフィスアワーはとくに設けず、面談・質問はメール (ssuzuki アト nagoya-u.jp アトは@に置き換え) で随時受ける。

(1) 講義名：異文化接触論演習 a

(2) 副題：諸文化共生の光と闇

(3) 担当教員：田所光男

(4) 開講時間：月曜 3 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

諸文化の比較研究の領域において修士論文・博士論文を執筆するために必要な知識を増やし、技法を高める。また口頭発表のやり方を訓練する。

(7) 履修条件等：なし

(8) 講義内容：

1. 論文批評

〈いい論文〉、〈よくない論文〉、とはどういうものかを考えてみたい。絶対にやってはいけないこと、最低限やるべきこと、こうするとよくなること、などを、実際の例にあたっていろいろ検討したい。具体的には、皆さんにとって当面の目標となる『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文を、各自が批評する。

2. 諸文化共生の問題の検討

現在、日本でも、中央省庁や地方自治体、ヴォランティア団体、また、大学などの研究・教育機関など、様々な領域で、「多文化共生」ということが盛んに語られている。しかし、この用語それ自体があいまいであり、「多文化」という直訳語はもちろんであるが、「共生」という言葉もどこかいかかわしい。もともと生物学の用語が人間社会に転用されているわけで、愛想はいいが、本当のところよくわからない。

差異をもった複数の集団の共生は、アラブ人とユダヤ人の場合に限られず、実現するのがきわめて難しい理想であろう。モロッコのイスラム教徒アブデルケビール・ハティビはこの種の共生の困難の一般性をこう指摘している。「いかなる国も、たとえその国に複数の言語や思考法が存在しないとしても、複数の存在、文化のモザイクです。しかし、このような複数性はこれまで一度として（もろもろの集団、民族、男女、権力のあいだの）対等な関係として構成されたことはなく、つねに支配被支配の不均衡な関係によって統御されてきました。[中略] 国を形作る異なる複数の要素の間にはつねに潜在的な軋轢が存在します。」〈仲良くやろう〉とか、〈みんな一緒〉というような言葉で示される共同性が隠すもの、抑圧するものがあり、美しく立派な共生を喧伝する公式の言葉に対し徹底的に懐疑的になる必要があることは確かであろう。

しかしこの問題はきわめて微妙である。一切の共生言説を警戒しようと説くこのハティビも、モロッコにおけるユダヤ人マイノリティの境遇を検討する場合には、自分の所属するムスリム・マジョリティの「正義」や「保護」を肯定的に述べている。それは、モロッコ出身のユダヤ人ヴィクトル・マルカが、フランス保護領時代のモロッコ社会を、

植民者フランス人、次いでアラブ人、そしてはるか下にユダヤ人、と三階層で描き出し、独立後のモロッコにおいても、ジンミー言説は公然と生きていたと断言することときわめて対照的である。共生言説を批判する人もまた、自己の所属や自己の差異の問題を通る時、他者を排除しないためには共生言説を必要としてしまうのであろうか。

全体としては次のようなプログラムを予定している。

- 1) 文化的差異に対する態度の三つのモデル
 - a 差別主義、明暗のコントラスト
 - b 同化主義、一面の銀世界
 - c 差異主義、多色刷り
- 2) 多文化共生への志向
 - a 同化主義で多文化共生は可能か
 - b 近代市民社会の公私の二分界
 - c 統合主義（リベラル多文化主義）における多文化の位置
 - d 多文化主義の目指すもの
 - e 文化相対主義の危うさ
- 3) 総務省研究会の「多文化共生」
 - a かつての「協和」的同化との違いは？
 - b 視野の中心からはずされた人々

結び：差異からの自由

(9) 成績評価の方法：

以下の3点から総合的に評価する。1) 『多元文化』や『Autres』に掲載されている論文、研究報告などの一作について口頭で批評を行なう。2) 授業中に挙げる論文あるいは著作について、口頭発表する。3) 学期末に筆記試験ないし口頭試験を受ける。

(10) 教科書：

必要な文献は、授業の中で適宜指示する。

(11) 参考書：

必要な文献は、授業の中で適宜指示する。

(12) 注意事項：なし

(1) 講義名：文化記号論 a

(2) 副題：記号論入門

(3) 担当教員：古田香織

(4) 開講時限：火曜3限

(5) 教室：文総 522

(6) 目的・ねらい：

記号論について、講義と文献読解（授業中に指示）により、その基本的理論、概念、方法論について学び、それらを実際の分析へ応用することによって、文化現象を多角的に捉えることのできる視野を養う。すなわち、記号論が、言語・文化の具体的な事象に

どのように応用されているのかについて色々な分析例に触れ、様々な理論の個々の研究への応用力を養う。学生諸君のそれぞれの研究テーマが記号論とは直接関係がないとしても、この授業を通して、柔軟な思考力・応用力・分析力を身につけてもらいたい。

(7) 履修条件等：

- 1) 受講にあたり、池上嘉彦著 『記号論への招待』岩波新書を読んでおくこと。
- 2) 後期開講の「文化記号論 b」を併せて受講することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

まず、講義を通して、記号論の全体像をつかんでもらう。すなわち、基本的な用語や考え方、主な記号論研究者についての知識を身につけてもらう。その上で、記号論という学問をさらに理解するために、記号論的な考え方やアプローチを用いた、あるいは応用していると思われる論文を発表形式で読みながら、さらに記号論についての見識を深めていく。

〔授業方法および計画〕

第1回目：教科書や参考書、授業についての細かい指示（発表の順番等）を行うので、受講予定者は必ず出席すること。

第2回目：記号論についての講義を行う。おもに、池上嘉彦著 『記号論への招待』の中で取り上げられている様々な記号論の概念について説明する。第一回目に指示した箇所について必ず予習をしてくること。

第3回目：引き続き記号論についての講義を行う。第2回目に指示した箇所について必ず予習をしてくること。

第4回目以降：この回以降は、発表形式による文献読解を行う。受講者は各自記号論に関する論文を読書報告する。他の受講者もあらかじめ読んでおき、報告の後で、質疑応答、ディスカッションを行う。

(9) 成績評価の方法：

評価は、課題（読書報告・レポート）および出席点による。受講者に担当してもらう口頭発表を40%、授業最終時に提出してもらうレポートを40%。さらに、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を20%程度として加味し、総合的に評価する。

(10) 教科書：

特に指定はせず、適宜プリントを配付する。

(11) 参考書等：

- ・池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書（必読文献）
- ・ウィリアムスン著、山崎／三神訳『広告の記号論Ⅰ、Ⅱ』柘植書房
- ・石田英敬『記号の知／メディアの知』東京大学出版会

その他、授業中に指示する。

(12) 注意事項：

受講を検討しており、初回の授業に参加できない場合は、前もって個別に相談に来ること。

(1) 講義名：中南米言語表現論演習 a (2010 年度から多元文化論講座で開講)

(2) 副題：スペイン語・ポルトガル語言語文化圏対照研究 a

(3) 担当教員：水戸博之

(4) 開講時限：前期木曜 4 限 (受講者と相談の上、変更あり)

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

(中南米言語表現論演習 a では、スペイン語圏を中心に扱う予定であるが受講者の諸条件を考慮し柔軟に内容を検討する。)

スペイン語とポルトガル語、両言語を広い視野から総合的に対照し知識と理解を深めるための演習である。すなわち本演習において、これら 2 言語自体に対し様々な領域や場において接触する可能性のある受講者が、研究を進めるための方法論に言語学的基礎付けする機会を見出すことを目的としている。なぜならば、東海・中部圏はこれら 2 言語に対する社会的需要が高く、問題に対処するためには、単なる会話能力のみならず、高度な言語学的素養も求められているからである。

本演習では、2 言語への習熟が単位認定の基本的要件となる。しかしながら、近親言語であっても両言語を等しく、いわゆるバイリンガルに扱うのは実際には極めて困難であるので、まずイベリア半島起源の言語に関わる知見を広げてみようといった好奇心を第一に課題に取り組んで欲しい。

(7) 履修条件等：

少なくともスペイン語またはポルトガル語いずれかの基礎的運用力。

いずれか一方を主専攻言語、他を副専攻言語と本演習では呼称する。スペイン語またはポルトガル語話者の留学生諸君の受講も歓迎する。留学生諸君は単なるインフォーマントとしての演習への参加のみならず、日本語および近親言語との比較対照により、母語について新たな発見とより深い認識が得られるであろう。

(8) 講義内容：

〔概要〕

演習であることから、様々な目的や条件を持った受講者に対応するため、開講時点では特に定めない。また、シラバス編集上、スペイン語圏とポルトガル圏とに分けて記載するが、両言語圏を並行して扱うことも可能である。

〔授業方法および計画〕(スペイン語圏関係を中心に)

以下に、過去数年間の主要な内容を示すので参考にしてほしい。

2010 年度：「解放の神学」の先駆的实践者の一人、アルゼンチン人神父カルロス・ムヒカの伝記(スペイン語)の始めの部分を講読。第二次世界大戦前後からペロン復権までのカトリック教会と社会に関する考察を行った。

2009 年度：演習 a は、スペイン語とポルトガル語と二つのグループに分けて実施した。

スペイン語圏専攻者のためのグループは、各週ほぼ 1 作の割合で、スペイン語圏各国を

代表する劇映画を視聴し、各地域の言語文化的特性を分析した。

ポルトガル語のグループは、ポルトガル語を専攻語学とする受講者とブラジル人留学生を対象に、日本語とポルトガル語の双方向のコミュニケーションを目標に、日本の新聞に現われたブラジル人コミュニティに関する記事の講読、ブラジルで制作された映画のポルトガル語字幕の活字おこしを通じた聴解練習とコミュニケーション分析などを行った。

2008 年度：文献の精読：ペルー農村部の教育問題、北部メキシコの農村の社会的変動

2007 年度：文献の精読：ペルーの国民文化形成、メキシコ社会の変容等。留学生を交えた討論等。 2006 年度：南米移民についての資料研究、発表、スペイン語文献の精読。留学生を交えた討論等。

2005 年度：スペイン語史・語学に関するスペイン語文献の講読と発表、討論。

複数年度にわたり適宜対象としてきた演習内容：日本国内制作のスペイン語・ポルトガル語メディア。日本国内のスペイン語話者、ポルトガル語話者の言語社会学的状況。

(9) 成績評価の方法：

スペイン語とポルトガル語 2 言語への習熟を前提に、次の 3 要素を中心に総合的に判断する。

- 1) 各自のテーマについての発表（学会・研究会等の発表も含む）。40%
- 2) 講読文献（スペイン語・ポルトガル語両言語）の精読による発表。40%
- 3) 副専攻言語（スペイン語またはポルトガル語）による作文演習（ネイティブチェックを受けること）。20%

(10) 教科書および(11) 参考書等：

最近使用した主要なものを掲載する。（スペイン語関係）

Martín de Biase, *Entre los fuegos Vida y asesinato del Padre Mugica*, Buenos Aires, 2009.

Jose Maria Arguedas, *Formación de una cultura nacional indoamericana*, México, 1998.

Milton M. Azevedo, *Introducción a la lingüística española* 2 ed., Pearson Education (New Jersey), 2005.

María Asunción Merino Hernando, *Historia de los inmigrantes peruanos en España*, Madrid, 2002.

E. Garduño; E. García; P. Morán, *Mixtecos en Baja California el caso de San Quintín*, Ciudad de México, 1989.

Eliana Ramírez Arce de Sánchez Moreno, *Estudio sobre la educación para la población rural en Perú* (Proyecto-FOA-UNESCO), s. f..

視聴した劇映画：「ラベリント・デ・パン」「ベンガ」「エビータの真実」「100 人の子どもたちが列車を待っている」「地下の民」「大きな翼を持った老人」「ローマの奇跡」「予告された殺人の記録」「わが心のマリア」「鳥の歌」

(12) 注意事項：

スペイン語とポルトガル語を扱うことを大前提としている演習である。演習 a と b を履修することが望ましい。演習 b からの履修も可。

先端文化論文化講座

- (1) 講義名：先端文化思想論 b
- (2) 副題：労働力均質化に向けた歴史的過程
- (3) 担当教員：越智和弘
- (4) 開講時限：火曜 3 時限
- (5) 教室：文総 609
- (6) 目的・ねらい

セクシュアリティ、とりわけ女性的快楽を敵視することで西欧を世界の支配文化たらしめる発展を可能にしてきた近代資本主義を支える精神に、いつから労働力均質化へ向けた萌芽がみられたのかを、著名な思想家や文学者の言説をたどりながら浮き彫りにする。

- (7) 履修条件等

前期の先端文化思想論 A を受講していることが望ましい。

- (8) 講義内容

〔概要〕

講義は、精神を武器に自然を支配するという西欧の男性が抱いてきた伝統的な意志に、16 世紀以降大きな変化が起きたことを起点に始められる。近代の幕開けを意味するこの変化の節目は、しかし一般に思われがちのように進歩への楽観主義に支配されていたのではない。そこには自然からの離脱に失敗した近代人の落胆と、理性と合理主義を柱とする世俗化によって今度こそは自然に対し勝利するという断固とした意志が秘められていた。この時期以降、数値的定量化への過大な信頼が高まる一方で、魔女迫害の嵐がかつてない規模でヨーロッパを吹き荒れるという矛盾を見据え、禁欲が新たなかたちで強化されていく過程を探る。

〔授業方法および計画〕

授業は、問題を解説する講義を数回おこなったあとで、テキストを受講者が分担し発表するというセットをくり返しながら進める。ただし、講義および発表の回数等は、受講者の人数に応じ適宜調整する。講義は、その大筋において、越智著『女性を消去する文化』の内容に沿ったものとなる。読解用に使用するテキストは、南部生協で製本販売する。

第 1 回目：講義方針の説明、担当者の割り当て

第 2 回目：「性の抑圧と資本主義の歴史的関係（1）」

第 3 回目：「性の抑圧と資本主義の歴史的関係（2）」

第 4 回目： テキスト講読

- 第5回目： テクスト講読
- 第6回目： テクスト講読
- 第7回目：「労働力均質化にいたる歴史的過程（1）」
- 第8回目：「労働力均質化にいたる歴史的過程（2）」
- 第9回目：「労働力均質化にいたる歴史的過程（3）」
- 第10回目： テクスト講読
- 第11回目： テクスト講読
- 第12回目： テクスト講読
- 第13回目：「労働力均質化にいたる歴史的過程（4）」
- 第14回目：「労働力均質化にいたる歴史的過程（5）」
- 第15回目：「労働力均質化にいたる歴史的過程（6）」

(9) 成績評価の方法

評価は、受講者に担当してもらう口頭発表を 40%、授業最終時に提出してもらうレポートを 40%。さらに、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を 20%程度として加味し、総合的に評価する。

(10) 教科書、参考書等

- ・越智和弘『女性を消去する文化』（鳥影社）
- ・講読用プリント製本

(11) 注意事項

特になし。

(1) 講義名：前衛芸術概論 b

(2) 副題：音楽と資本主義（2）

(3) 担当教員：藤井たぎる

(4) 開講時限：火曜 5 時限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

近現代音楽の構造と資本主義社会のメカニズムとが、いかに相互に関連しあっているかを具体的に検証し、「近現代音楽史」を読み解くための“技法”を身につける。

(7) 履修条件等：

原則として「前衛芸術概論 a」を受講していることが望ましい。ただし、「近現代音楽史」について一定の関心を有している場合は、その限りではない。

(8) 講義内容：

〔概要〕

音楽様式は思想や政治形態ばかりでなく、経済機構とも密接に関わっていると言ってよい。たとえば音楽の生産者が、市場価値を生むために音楽制作に勤しむのは当然のことだろうし、『のだめカンタービレ』ブームやヴィジュアル系演奏家の増産などに見られるクラシック音楽のサブカルチャー化も、そうした活動の末端現象であることは指摘

するまでもないだろう。しかしここで考えてみたいのは、そうした誰の目にも明らかでない現実ではなくて、調的和声音楽や、市場経済とはまったく無縁な、あるいはむしろそれに対して明らかに警戒心と嫌悪感すら示していたシェーンベルクやその末裔の“現代音楽”が、凶らずも資本主義的構造を表象してしまっているという“歴史的事実”なのである。音楽の生産（作曲・演奏）および消費（受容）のみならず、近代以降の音楽の構造やシステム自体が徹頭徹尾、資本主義的であるという仮説を検証する。

〔授業方法および計画〕

毎回、受講者にはあらかじめ読んでおくべきテキスト・参考文献などが指定される。それを授業での議論のたたき台とし、以下の各項目についてそれぞれ3～4回（ただしエピローグは1回）の講義時間をあてる予定である。

*愛と死のオペラ史（2）：モーツァルトの恋愛形態論

*ルル＝貨幣：オペラの終焉

*グレン・グールドの“贗金づくり”：“本物”の音楽／“偽物”の音楽

*ポスト産業資本主義時代の作曲：作曲の未来？

*エピローグ：音楽と非音楽の境界

(9) 成績評価の方法：

出席（40%）、授業への積極的貢献（30%）、発表（30%）。期末レポートは課さないが、毎回、指定されたテキスト・参考文献をあらかじめ読んで、議論に積極的に参加できるように準備をしたうえで、出席すること。また授業に関連するテーマで、受講者には少なくとも一回は口頭発表をしてもらう。

(10) 教科書、参考書等：

授業中に指定する。

(11) 注意事項：

事情によって欠席する場合は、できるかぎり担当教員にメールであらかじめ報告すること。

(1) 講義名：現代民主主義特論 b

(2) 副題：ラディカルな民主主義とその理論的・哲学的諸前提

(3) 担当教員：布施哲

(4) 開講時限：火曜 6 時限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

国内外の政治的、社会的動向を、人文社会科学の知識を下地に考察するとともに、逆に前者に照らし合わせながら後者に対して必要な理論的修正を加え得るだけの知性を磨く。

(7) 履修条件等：

日本語の非常に高度な運用能力はむろんのこと、英文で書かれた専門書や評論を読み込むだけの英語力、さらには必要に応じて最小限のフランス語文献読解能力も必須とな

る。また、政治学や哲学の基本的概念を、わからなければその都度、自ら調べて理解しようとする積極性のない学生はこの講義にはまったく向かない。さらに、「教科書・参考書等」欄に記載の文献は、本講義内容を理解するにあたって最低限必要なものであるため、遅くとも学期中にはすべて一通り目を通しておくことが強く望まれる。

(8) 講義内容：

〔概要〕

ここ数百年のうちに人類が築いてきた物質文明の限界が露呈してきた現代においては、政治、社会、経済、国家、市民、民族、アイデンティティ等々について語るうえで、私たちが普段は自明視している様々なものの考え方それ自体に対する原理的な分析・説明が、ますます必要になってきている。そうした問題意識ならびに状況を背景とする本授業は、したがって、必然的に哲学的な議論の比重が高くなるが、それは現実離れした誇大妄想や内省的な「自分探し」の類とは真逆の、アクチュアリティに富んだ、しなやかでありながらも強靱な知性を涵養するためのものである。

〔授業方法および計画〕

前期・後期とも、数回の講義を経て学生諸氏の基本的な理解度やパフォーマンスを見極めたいうえで、読解を進めてゆく主たるテキストをあらためて指定する。テキスト指定後は、学生による発表内容を叩き台としつつ、テキスト当該個所の主要なサブテーマを明確化すると同時に、それが今日的な問題といかに関わり、あるいはいかに関わらないかについての議論を進めてゆく。

(9) 成績評価の方法：

出席：30%、授業への積極的貢献：40%、発表：30% (ただし、学生によって学期末にレポートを課す場合がある。)

(10) 教科書、参考書等：

【哲学・精神分析】

- ・ カント 『純粋理性批判』、『実践理性批判』
- ・ ヘーゲル 『精神現象学』、『小論理学』
- ・ ハイデガー 『形而上学入門』
- ・ フロイト 『精神分析(学)入門』、『夢判断』、『快樂原則の彼岸』

【政治学・政治思想】

- ・ ホッブス 『リヴァイアサン』
- ・ マキアヴェッリ 『君主論』、『リウウィウス論』
- ・ マルクス 『経済学批判』、『ドイツ・イデオロギー』
- ・ シュミット 『政治的なものの概念』、『政治神学』
- ・ バーリン 『自由論』
- ・ ロールズ 『正義論』
- ・ ラクラウ＝ムフ 『ポスト・マルクス主義と政治』
- ・ 藤田省三 『天皇制国家の支配原理』、『維新の精神』
- ・ 京極純一 『日本の政治』

・ 布施哲『希望の政治学ーテロルか偽善か』

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：現代先端文化分析演習 b

(2) 副題：フーコーの身体論

(3) 担当教員：山口庸子

(4) 開講時限：月曜 4 時限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

かつて「文化」と対立する「自然」と見なされていた人間の身体は、今や生物学的と伴であると同時に、社会的・文化的構築物でもと考えられ、「身体の歴史」が活発に論じられるようになった。その議論に大きな影響を与えているフーコーの身体論について、基礎的な知識を得ることを目的とする。

(7) 履修条件等：

フーコーのテキストは、邦訳を用いる。履修条件は特に指定しないが、身体史・身体文化・身体芸術等に何らかの関心を持っていることが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

19 世紀の終わり、ニーチェは、文化を「正しい箇所」から、つまり「魂」ではなく、「身体、身振り、食事管理、生理学」から始めることが決定的意味を持つ、と述べていた。彼は、「認識」も何らかの真理に基づくのではなく、長期における反復によって「血肉化」された習慣であると考えていたのである。文化現象を、身体という観点から考察しようというこのような眼差しは、20 世紀になって、モース、エリアス、フーコー、ブルデューらに受け継がれ、広大な身体史の分野が姿を現しつつある。なかでも、フーコーの身体論は、大きな影響力を持っている。本演習では、フーコーの幾つかの著作を取り上げ、フーコーの身体論の基本的な枠組みを理解しつつ、その内容を批判的に検討する。

〔授業方法および計画〕

取り上げる予定の著作（抜粋）は以下の通り。『精神疾患と心理学』『狂気の歴史』『臨床医学の誕生』『監獄の誕生』『性の歴史』。ただし、参加者の関心や前提となる知識を考慮して内容を変更することがある。授業予定表・文献表は、最初の授業時に配布する。

(9) 成績評価の方法：

出席：40%、課題の達成：30%、授業への積極的貢献：30%

(10) 教科書、参考書等：

最初の授業時に指示する。

(11) 注意事項：

オフィス・アワーは必要に応じて随時。メールで予約すること。また、やむを得ぬ理

由により欠席するときは、届け出ること。

アメリカ言語文化講座

- (1) 講義名：現代アメリカ文化論 b
- (2) 副題：大恐慌時代のアメリカ文学・文化 2
- (3) 担当教員：長畑明利
- (4) 開講時限：月曜 6 時限
- (5) 教室：文総 609
- (6) 目的・ねらい：

大恐慌時代（主として 1930 年代）のアメリカ文学・文化に関する知見を高める。文学・文化テキストの分析方法を学ぶとともに、高度な英文読解力を身につける。

- (7) 履修条件等：

基礎的な英語読解力を有すること、学習に対する意欲、積極性を有することを履修の条件とする。前期同時限に開講される「現代アメリカ文化論 a」と連続して受講することが望ましい。

- (8) 講義内容：

現代アメリカ文化論 a」（前期）と「現代アメリカ文化論 b」（後期）を通じて、大恐慌時代のアメリカ文学・文化について学ぶ。b（後期）では、大恐慌時代の代表的な文学作品を採り上げ、議論する。授業は発表形式で行う。担当者は、担当するテキスト（もしくは分担箇所）中の任意の箇所の「和訳」と、その箇所と関係する視点に基づくテキスト全体についての「論評」を授業前日（日曜）に ML に投稿する。受講者は各自投稿された「和訳」と「論評」を読んだ上で授業に出席する。授業では、担当者の「和訳」と「論評」について検討した上で、受講者全員でテキストディスカッションを行う。学期末に、期末レポートを課す。また、前期同様、大恐慌をテーマにした映画、大恐慌時代の音楽について短いレポートを課す。授業計画については、下記の授業 HP を参照のこと。

- (9) 成績評価の方法：基礎的な英語力を有することを単位取得の条件とする。そのうえで、授業点（及び小レポート）50%、期末レポート 50%。欠席 3 回で単位放棄と見なす。

- (10) 教科書：

・授業で採り上げる作品は授業 HP に掲載する。

- (11) 参考書：

・授業 HP もしくは ML にて紹介する。

- (12) 注意事項：授業に関する連絡は ML もしくは授業 HP にて行う。授業 HP は次の通り。<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~nagahata/lectures11/amcul11b/amcul11b.html>。

- (1) 講義名：言語文化情報論 b

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：尾関修治

(4) 開講時限：火曜 2 限

(5) 教室：北棟 309

(6) 目的・ねらい：

英語教育をはじめとした教育現場でコンピューターとネットワーク(ICT)をいかに教育支援に活用するかを学ぶ。単に利用のテクニックや開発手法だけでなく、ICTの活用が教育にどのような意味を持つのかについても議論する。今期は特に自主学習を支援するドリル問題型教材の開発を中心に学ぶ。

(7) 履修条件等：

コンピューターとインターネット利用に関して一般的な技能が必要。HTML その他の web 技術についても既習であることが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

英語教育はいくつかの特徴から ICT の利用が活発な領域である：学習者の年齢等の幅が広い；シラバスが確立されている；音声教材が必須である；その他。英語教育での e ラーニング開発と活用を学ぶことで他の領域での教育支援にも応用可能な技術と知見を得ることができる。

「e ラーニング技術演習 b」では以下の内容をそれぞれ 1 回ないし数回の授業で取り上げ演習する：

- ・ ICT 利用教育とは何か。ICT 利用教育に求められるもの。
- ・ 学習支援サイトの設置と運用
- ・ e ラーニング教材作成の実際

以下のサービスとツールを取り上げ、解説と実習を行なう：HTML と CSS, JavaScript, XHTML, Hot Potatoes と XoopsHP, eXe 等の教材作成ツール、音声のデジタル化とポッドキャスト、動画のエンコーディングと共有、Blog と XML、検索エンジン、CMS、LMS、Wiki、iTunes と iPod

予定されるレポート課題の例：自習型 e ラーニングコースの制作

〔授業方法および計画〕

第 1 回：ICT 利用教育とは何か。英語利用教育に求められるもの。

第 2 回：学習支援サイトの設置と運用 1

第 3 回：学習支援サイトの設置と運用 2

第 4 回：学習支援サイトの設置と運用 3

第 5 回：英語 e ラーニング教材作成実習 1

第 6 回：英語 e ラーニング教材作成実習 2

第 7 回：英語 e ラーニング教材作成実習 3

第 8 回：英語 e ラーニング教材作成実習 4

第 9 回：LMS の導入と運用 1

第10回：LMSの導入と運用2

第11回：LMSの導入と運用3

第12回：LMSの導入と運用4

第13回：課題発表1

第14回：課題発表2

第15回：講評とまとめ

予定されるレポート課題の例：自習型eラーニングコースの制作

(9) 成績評価の方法：

開発や議論を重ねることで自分のアイデアをどのように発展させていったかというプロセスを重視して評価する。したがって、講義期間を通して授業サイト上のWiki等に記述したメモや課題が直接的な評価の対象となる。

(10) 教科書、参考書等：

HTMLの文法書等を必要に応じて使用する。

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：現代アメリカ社会史特論 b

(2) 副題：アメリカ社会・文化史研究の動向と課題

(3) 担当教員：山本明代（非常勤講師・名古屋市立大学）

(4) 開講時限：木曜4時限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

授業の目的は以下の二点である。

a. アメリカ社会・文化史に関する特定のテーマを取り上げ、そのテーマについての一次史料と二次史料を精読し、解釈や分析の際の注意事項や方法について講義とディスカッションを行う。とりわけ、一つのテーマに関する一次史料と二次史料を複数同時に扱うことによって、それぞれの史料の特徴や位置づけを意識しながら史料批判の方法を学ぶ。加えて、近年の社会・文化史研究動向と課題についても学ぶ。

b. 論文執筆に欠かせない基本的なルールについて確認する。また、各自が選定した研究課題に関するプレゼンテーションを行う。

(7) 履修条件等：

・一次史料・二次史料はともにすべて英語文献を使用するため、英語の読解力は不可欠である。

・前期の現代アメリカ社会史特論 A を受講していることが望ましい。

(8) 講義内容：

<授業の概要 >

a. 社会史研究に関する先行研究の整理と近年の研究動向

1960年代以降の日米欧における社会史研究の興隆と課題について、基本文献の確認

や近年の研究動向を踏まえつつ検討する。

b. 社会・文化史研究の一次史料・二次史料の精読と解釈

社会・文化史研究に関する特定のテーマについて、複数の一次史料と二次史料を同時に取り上げ、比較・対比しながら精読と解釈のトレーニングを行う。教材としては、アメリカ合衆国の社会史・文化史、現代史に関する史料を扱う。ただし、取り上げる具体的なテーマについては、受講生の皆さんと相談のうえ、各自の研究テーマになるべく近いものを選ぶ予定である。

c. 個別報告

各自の研究テーマに近い社会・文化史のテーマを選定し、史資料・文献の調査結果と研究内容を個別報告として行う。詳しくは授業中に説明するが、研究テーマの絞り方や研究スケジュールの作成例などについても確認する。また、文献の引用方法や注の機能など、学術論文の読解・執筆に不可欠な基本的なルールについても学ぶ。

<授業計画>

第1回：概要説明

第2回：アメリカ社会・文化史研究の動向

第3回：アメリカ社会・文化史研究の課題

第4回：各自の研究テーマの選定と発表

第5回：アメリカ社会史研究の史資料分析—エスニシティ（1）

第6回：アメリカ社会史研究の史資料分析—エスニシティ（2）

第7回：アメリカ社会史研究の史資料分析—人種（1）

第8回：アメリカ社会史研究の史資料分析—人種（2）

第9回：アメリカ社会史研究の史資料分析—ジェンダー・セクシュアリティ（1）

第10回：アメリカ社会史研究の史資料分析—ジェンダー・セクシュアリティ（2）

第11回：アメリカ社会史研究の史資料分析—階級（1）

第12回：アメリカ社会史研究の史資料分析—階級（2）

第13回：各研究テーマの報告と議論（1）

第14回：各研究テーマの報告と議論（2）

第15回：各研究テーマの報告と議論（3）

定期試験：期末レポートの提出に替える

(9) 成績評価の方法：

毎回の授業時に提出する課題（レジュメ、書評などを含む） 40%

個別報告 30%

期末レポート 30%

(10) テキスト：

・最初の数回のみ、以下のテキストを使用する。

アメリカ学会訳編『原典アメリカ史—社会史史料集』（岩波書店、2006年）。

・11月上旬以降に使用するテキスト（英語文献）については開講時に相談のうえ、指定する。

(11) 参考書・参考資料等：授業中に随時紹介する。

(12) 注意事項：

・一次史料・二次史料の精読のトレーニング用の文献を決定するため、第一回目の講義には必ず出席すること。

・この授業は演習形式で行うので、各自で事前に共通文献を精読し、毎回のディスカッションに参加することが単位取得の条件となる。

・病気等でやむを得ず欠席する場合は、事前にメールで連絡すること。

(1) 講義名：第二言語習得演習 b

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：村尾玲美

(4) 開講時限：木曜 3 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

This course provides an overview of the major issues in the area of Applied Linguistics including Second Language Acquisition, Psycholinguistics, and Sociolinguistics. The goal of this course is to

- ・ familiarize students with the key issues in Applied Linguistics,
- ・ familiarize students with various research approaches, and
- ・ have students be able to analyze and interpret some of the data on their own.

(7) 履修条件等：

特になし

(8) 講義内容：

〔概要〕

We will use “An introduction to Applied Linguistics” by Norbert Schmitt as our textbook. Topics include issues and findings in grammar and vocabulary acquisition, discourse analysis, pragmatics, corpus linguistics, language skills, and some other areas. In this course, special attention is paid on the research methodology used in the field in order to have students be able to design and conduct their original study in the future. Each chapter is written by the authority of the area which has ‘Hands-on-Activity’ to work on. Through these activities, participants will discuss how the data should be analyzed and interpreted.

〔授業方法および計画〕（7行）

Students will be assigned to present a summary of each chapter. All students are required to read the chapter scheduled for next week, and to work on ‘Hands-on-Activity’ before class to be able to participate in discussions. Further discussions will be done online.

1: Course description and chapter assignment

2: An overview of Applied Linguistics

3: Grammar

- 4: Vocabulary
- 5: Discourse Analysis
- 6: Pragmatics
- 7: Corpus Linguistics
- 8: Second Language Acquisition
- 9: Psycholinguistics
- 10: Sociolinguistics
- 11: Focus on the Language Learner: Styles, Strategies, and Motivation
- 12: Listening
- 13: Reading
- 14: Writing
- 15: Assessment

(9) 成績評価の方法：

Attendance 30%, Presentation 40%, Discussion and forum participation 30%.

(10) 教科書、参考書等：

Norbert Schmitt (eds.) (2010). An Introduction to Applied Linguistics. Hodder & Stoughton Ltd.

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：社会言語学入門 b

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：Liang Chua Morita

(4) 開講時限：火曜 2 時限

(5) 教室：文総 522

(6) 目的・ねらい: To learn from recent research on bilingualism and to distinguish between fact and myth about bilingualism.

(7) 履修条件等：特になし

(8) 講義内容：

We will be focusing on bilingualism this semester. Bilingualism or multilingualism is a frequently misunderstood phenomenon. Many parents and teachers are afraid of letting young children learn English because they think it will interfere with their Japanese language development. Some worry that learning other languages means there will be less space in our brains for subjects such as science and mathematics. Thanks to research in bilingualism in recent decades, we now know that these worries are unfounded.

The topics to be covered include early development of bilingualism; later development of bilingualism; language shift (especially in Hokkaido and Okinawa); language situation of ethnic minorities (especially the Koreans and Brazilians); language minority students in Japanese

public schools; and bilingual education in Japan.

<授業計画>

- 第1回：Introduction
- 第2回：The early development of bilingualism
- 第3回：The early development of bilingualism
- 第4回：The early development of bilingualism
- 第5回：The later development of bilingualism
- 第6回：The later development of bilingualism
- 第7回：The later development of bilingualism
- 第8回：Bilingualism and cognition
- 第9回：Bilingualism and cognition
- 第10回：Bilingualism and cognition
- 第11回：Special interest topics
- 第12回：Special interest topics
- 第13回：Special interest topics
- 第14回：Special interest topics
- 第15回：Special interest topics

(9) 成績評価の方法：attendance, participation, preparedness for lessons and presentations

(10) 教科書：

- ・ Baker, C. 2006. *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Clevedon: Multilingual Matters.
- ・ Noguchi, M. G. and Fotos, S. 2001. *Studies in Japanese Bilingualism*. Clevedon: Multilingual Matters.

東アジア言語文化講座

- (1) 講義名：韓国・朝鮮語表現論演習 b
- (2) 副題：日本語話者向け韓国語教育における諸問題（統語論）
- (3) 担当教員：飯田秀敏
- (4) 開講時限：水曜 2 限
- (5) 教室：北棟 105
- (6) 目的・ねらい：

日本語話者を対象とする韓国語教育において教師が備えておくべき現代韓国語及び日本語の統語論の基礎を整理し、教育現場で生じると考えられる諸問題を効果的に解決するための方法を検討することを目的とする。

- (7) 履修条件等：

受講者は中級程度以上の韓国語能力を持っていることが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

まず、教科書に基づいて、韓国語の統語論に関する基礎知識を習得する。次いで、日本語話者を対象とする韓国語の教育現場でよく生じると考えられる統語論に関する具体的な問題を取り上げ、問題点の把握→問題点の解決に必要な統語論の基礎知識の整理→問題解決の方策の方向付けで検討する。

〔授業方法および計画〕

教科書に基づいて分担者が基礎知識を整理し、受講者全員で問題点を指摘し、その解放を議論する。授業の進め方のおおよその目安は次の通りである。

第1回目～第7回目：文構造

第8回目～第11回目：敬語法

第12回目～第15回目：その他の問題

(9) 成績評価の方法：

授業中の発表 50%，レポート 30%，平常点 20%

(10) 教科書、参考文献等：

I Ik-seop, I Sang-eok, Chae Wang 『Hangukeui Eeneo』 (Singumunhwasa)

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：東アジア言語論演習 b

(2) 副題：対照アスペクト論研究

(3) 担当教員：柳沢民雄

(4) 開講時限：水曜 3 限

(5) 教室：文総 522

(6) 目的・ねらい：

言語研究は個別の具体的な言語を研究することが主でなければならない。それも音韻だけとかシンタクスだけしか研究しないということであってはならない。ある特定の言語を研究するのであるならば、その言語の音声、音韻から形態論、シンタクス、意味論までの全ての領域にわたって専門の知識を蓄えるべきであろう。またそういった個別言語の研究と同時に、世界の様々な諸言語に見られる音声、音韻、文法カテゴリー、シンタクスなどの一般的な理論研究も必要であろう。人間が使う自然言語には言語の様々なレベルで類似の特徴が多く見られる。そういった人間言語の特徴とはなにかというより広い視野から、常に自分の専門とする個別言語の研究に向かうべきであろう。本講義は後者のより広い視野から言語のある文法的側面を検討しようというものである。

(7) 履修条件等：

特になし。

(8) 講義内容：

〔概要〕

今年度は世界の言語に見られる動詞アスペクト(verbal aspect)について検討する。アスペクトはスラヴ諸語が有名であるが、スラヴ諸語だけでなく世界の多くの言語に普通に見られる文法カテゴリーである。アスペクトとは、動詞が表す動作をどのように言語がとらえるか、すなわち、状態としてか動作としてとらえるのか、限界動作としてか非限界動作としてとらえるのか、限界到達としてか限界非到達としてとらえるのか、といった動作のとらえ方の言語的反映である。従ってアスペクトのカテゴリーはほとんどの言語に何らかの形で反映されると思われる。

スラヴ諸語においてはアスペクトが形態的に高度に発達しているため、アスペクト研究はスラヴ諸語の研究から発達した。そのためロシアにおいては、個別アスペクト研究だけでなく、一般アスペクト研究もかなり豊かな蓄積がある。特にアスペクト研究の専門家である Yu. S. Maslov による一般アスペクト研究は優れたものであるが、日本では一部のスラヴ語専門家や朝鮮語専門家以外に知られていないのではないかと思う(著作がロシア語によるために日本ではほとんど知られていない)。Maslov の研究は、日本で著名な Comrie のアスペクト論とはまた違った本格的なものである。

前期は、この Maslov の入門的な ‘An outline of contrastive aspectology’ (pp.1-44) という論文を使って講義をおこなう。この論文は ‘contrastive’ とあるが世界の諸言語に見られるアスペクト範疇を概略し、理論的な枠組みを提示したものである。

後期はアスペクトと他の文法カテゴリーとの関連を視野に入れてアスペクトを考察する。特に談話(discourse)におけるアスペクトの関係を考察する。これは最近とくに研究が進んだ分野であり、談話分析を通してアスペクトを説明するものである。

[授業方法および計画]

Hopper & Thompson (1980): *Transitivity in Grammar and Discourse* の論文を読み、談話(discourse)における他動性を理解する。次に Hopper (1982), Chvany (1990), Thelin (1990) などの論文を読み、談話とアスペクトの関係を理解する。このさいに具体的な例として、ロシア語の小説を材料にを使って談話におけるアスペクト(完了体と不完了体)の使用について説明する。最後に受講生が専攻する言語の談話とアスペクトについて分析し、発表してもらう。

(9) 成績評価の方法:

評価は口頭発表とレポートを各 50 パーセントとして評価する。

(10) 教科書:

Hopper, P. J. & Thompson, S. A. 1980. *Transitivity in Grammar and Discourse*. *Language*, Vol. 56, No.2, pp. 251-299.

Hopper, P. J. 1982. *Aspect between Discourse and Grammar: An Introductory Essay for the Volume*. In Hopper, P. J. (Ed.) *Tense-Aspect: Between Semantics & Pragmatics*. pp. 3-18. Amsterdam/Philadelphia. John Benjamins Publishing Company.

Chvany, C. V. 1990. *Verbal Aspect, Discourse Saliency, and the So-Called “Perfect of Result” in Modern Russian*. In Thelin, N. B. (Ed.) 1990: pp. 213-235.

Thelin, N. B. 1990. Verbal aspect in discourse: on the state of the art. In Thelin, N. B. (Ed.) 1990: pp. 3-88.

(11) 参考文献：

Hopper, P. J. 1979. Aspect and Foregrounding in Discourse. In Givón, T. (Ed.) *Syntax and Semantics: Discourse and Syntax*. Vol. 12. New York. Academic Press. pp. 213-241.

Maslov, Ju. S. 2004. *Izbrannye trudy: Aspektologija. Obshchee jazykoznanie*. Moskva: Jazyki slavjanskoj kul'tury.

Thelin, N. B. 1990. *Verbal Aspect in Discourse. Contributions to the Semantics of Time and Temporal Perspective in Slavic and Non-Slavic Languages*.

(12) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：漢民族文化論 b

(2) 副題：中国における 1920～30 年代の文学と知識人

(3) 担当教員：楊曉文

(4) 開講時限：月曜 6 限

(5) 教室：北棟 107

(6) 目的・ねらい：

I. 中国における 1920～30 年代の文学とは何か、当時の知識人が何を考え、激動の時代をどう生き抜いたのかを理解する。

II. 中国文学研究における方法論等を学ぶ。

(7) 履修条件等：

前期（漢民族文化論 a）から引き続き履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

中国における 1920～30 年代の文学を対象として考える場合、種々さまざまな角度による考察が可能であるが、本講義では、受容と展開という視点からのアプローチを試みる。中国近現代文芸の草創期には、海外の文芸理論の紹介が盛んに行われていた。欧米からの直接的な受容も見受けられたが、アジアでいち早く近代化を成し遂げ、かつ漢字を共有する日本を経由して間接的にそれを吸収するケースが最も多く、そこに日本的な工夫が加味されたからこそ、中国のインテリの興味と関心を惹いたのではなかろうか。厨川白村の文芸理論専門書『苦悶の象徴』の中国語訳が魯迅と豊子ガイ [「ガイ」は立心偏に「豈」] により同時に出版されたのは、このことを雄弁に物語っている。『苦悶の象徴』が民国文壇にどのような影響を与えたか、中国の知識人はそれをいかに自分のものとしたのか、『苦悶の象徴』の受容過程に見出される文化的戦略とは何かなどについて、この講義を通して考えていく。

〔授業方法および計画〕

I. 『苦悶の象徴』の翻訳に見られる魯迅の意図や、白村理論を魯迅がどのように自ら

の創作にいかしたのかをめぐって、一部講読もまじえて講義する。

II. 豊子ガイがいかにか『苦悶の象徴』を受容し、展開していったかを分析する。

III. 受講者がそれぞれ自らの研究テーマについて発表し、それについて全員で討論する。

(9) 成績評価の方法：

評価は、受講者に担当してもらった口頭発表を 40%、授業最終時に行う試験を 40%。さらに、出席、授業中の態度、積極的な発言や討論への参加度を 20%程度として加味し、総合的に評価する。

(10) 教科書、参考文献等：

別途指定する。

講読用プリント製本。

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：現代中国語表現論 b

(2) 副題：中国語学の諸問題

(3) 担当教員：丸尾誠

(4) 開講時限：月曜 3 限

(5) 教室：文総 609

(6) 目的・ねらい：

本講義では中国語学に関する中国語で書かれた論文(必要に応じて日本語で書かれたものを扱うこともある)の講読を通して、現代中国語における文法研究の方法論を身につけていく。

(7) 履修条件等：

前期(現代中国語表現論 a)から引き続き履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

ある言語事象について、その問題の所在を明らかにするとともに、形式・意味・語用・認知などの側面から、総合的に分析を加えていく。講義時には、一般言語学的な視点をも交えて、現代中国語の文法事項について相対的に論じる。一般言語学における言語理論が、往々にしてその特異性ばかりが強調されがちである中国語という言語を分析する際にどこまで有用かという問題についても併せて考えてみたい。履修の前提として言語学・日本語学・英語学などの知識をある程度有することが望ましい。従って、専門外の学生については、必要に応じて当該事項や概念・用語を調べてくることを別途課題として課すことがある。

〔授業方法および計画〕

後期も前期同様、論文講読が主となる。日本語に訳していく過程において、適宜用語や概念の解説を行う。原書講読の際には、必ず予習をしていくこと。

(9) 成績評価の方法：

レポートほぼ 100%。出席などによる平常点は成績評価時に、補助的に用いることがある。課題は原則として授業で扱った複数のテーマの中から選択できる形式とし、その中に「自分の興味のある文法事象」について自由に論じるものも入れる予定である。その場合、問題の発掘という点が、とりわけ重要となる。

(10) 教科書：

プリントを配布する。学界の動向をも見据えつつ、定期的に刊行される学術雑誌の新しい論文・著書に細心の注意を払い、必要に応じてそれを教材として使用することもある。

(11) 参考文献：

取り扱うテーマに関連する個別の専門書・論文等については授業時に随時紹介するものの、中国語の文法を体系的に理解し、理論を構築していく際の前提となるものとして、以下に挙げるものに常日頃目を通して、文法研究の方法論を把握しておくことが望ましい。

① 朱徳熙《語法講義》商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）

② 朱徳熙《語法答問》商務印書館（邦訳：『文法のはなし－朱徳熙教授の文法問答－』中川正之・木村英樹編訳，光生館） ※この②については邦訳本の方に訳者による詳しい注釈がついており、参考になるところが大きい。

③ 輿水優『中国語の語法の話－中国語文法概論－』光生館

(12) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：現代中国語表現論演習 b

(2) 副題：日中対照研究の可能性

(3) 担当教員：勝川裕子

(4) 開講時限：火曜 4 限

(5) 教室：文総 623

(6) 目的・ねらい：

□ 主に中国語文法に関する諸問題を取り上げ、論文講読を通じて、問題の設定やアプローチの仕方等、文法研究の方法論を学ぶ。

□ 言語教育への応用を目的とした日中対照研究の可能性を探る。

(7) 履修条件等：

前期（現代中国語表現論演習 a）を履修していることが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

言語の表現形式はその言語を使用する民族集団の事象・現象・心象に対する認識を

反映している。本演習では、中国語話者が、空間・時間・数量・否定・可能などに関わる事象をどのように認識し、それがどのように言語化されているかについて、統語的、意味的側面から探っていく。同時に、日本語表現との比較対照を通じて、それぞれの言語内部に見られる種々の現象を有機的に関連付けていきたい。また、中国語教育、日本語教育において、日中対照研究の成果をいかに応用していくかについても併せて考えていく。

〔授業方法および計画〕

後期も前期同様、授業前半では中国語文法に関する個別的な問題を取り上げ、論文を輪読しながら、全員で討論する。授業後半では毎回、受講者による研究発表（30分）とそれに対する質疑応答（15分）を行う。発表担当者には、授業で取り上げたテーマ、もしくは中国語・日本語における任意の言語事象を取り上げ、問題点の整理と独自の分析・考察を発表してもらおう。（※発表の1週間前までにレジュメを作成し、教員の添削、修正を経た上で発表に臨んでもらいます。）

(9) 成績評価の方法：

以下の3点に基づき、総合的に評価する。

- ① 授業（ディスカッション等）への参加度（30%）
- ② 研究発表（30%）
- ③ 学期末のレポート（40%）

※②③に関して、特に言語専門の受講者は、自身が関心を持つ任意の言語事象を取り上げ、関連付けて分析を深めていくことが望ましい。

(10) 教科書：

プリントを配布する。その他、取り上げるテーマに関連する個別の参考文献等についても、授業時に随時紹介していく。

(11) 参考文献：

中国語文法の体系的把握や文法研究の方法論理解に役立つものとして、以下の文献を通読しておくことが望ましい。

- ① 朱德熙《語法講義》商務印書館（邦訳：『文法講義』杉村博文・木村英樹訳，白帝社）
- ② 呂叔湘等著・馬慶株編《語法研究入門》商務印書館
- ③ 陸儉明《現代漢語語法研究教程》北京大学出版社
- ④ 徐烈炯・邵敬敏主編《漢語語法研究的新拓展》浙江教育出版社

(12) 注意事項：

中国語論文も題材として扱うため、中国語がある程度理解できることが望ましい。

本演習は受講者の人数、関心等に応じて内容を調整し、演習形式で進めるため、発表・ディスカッションを通じた積極的な参加を期待する。尚、専門分野を問わず、言語に対する強い関心や意欲のある学生の履修は大いに歓迎する。

ヨーロッパ言語文化講座

- (1) 講義名：ヨーロッパ都市文化論 b
- (2) 副題：ギッシングを通して見る首都ロンドンの下層中産階級の実態
- (3) 担当教員：松岡光治
- (4) 開講時限：木曜 6 限
- (5) 教室：文系総合館 623
- (6) 目的・ねらい：

この授業は将来高校や大学で教養レベルの英語を教えるための読解力養成を兼ねている。真摯な受講生は、英語の文学作品やその他の文献の精読および多読により、英語読解力が徹底的に鍛えられる。また、英語読解力の向上とは別に、人口に膾炙した問題でも、新たな解釈のできるような独自の視点の発見に努めてもらう。

- (7) 履修条件等：

授業は英語文献の輪読および教員の解説が中心となるが、担当以外の箇所も真摯に予習する義務が課される。

- (8) 講義内容：

〔概要〕

ヴィクトリア朝の小説家（特にディケンズ、ギャスケル、ギッシング）の作品には、当時の人々が都市に対して抱いていたアンビヴァレンスをイメージ化した言説が充満している。ヴィクトリア朝の都市は、単なる背景を提供する場ではなく、綺羅星のように光かがやくと同時に、悪夢のように恐ろしい空間であった。都市の繁栄の裏面にあるスラム街、貧困、犯罪、売春、アヘン中毒などは、そうした都市空間の脆弱さを表象したものだと言える。授業では、このように近代人の意識が捉えた都市のイメージをできるだけ多くの視点から考察するが、独自のアプローチをするための新しい視点の発見には学際的研究が必要で、授業とは別に様々な文化史および批評理論関連の文献を読んでもらう。

〔授業方法および計画〕

後期は、後期ヴィクトリア朝の作家で 2007 年に生誕 150 年を迎えたジョージ・ギッシングの処女作『暁の労働者』を演習形式で読み、首都ロンドンが抱える様々な社会問題を考察する。ギッシングの関する基礎的な知識は、教員が運営・維持するウェブ・サイト、“Gissing in Cyberspace” を参照のこと。ギッシングは彼の生涯において強迫観念となった階級・金銭・セックスの主題を『暁の労働者』の中ですでに提示している。十九世紀後期における喧噪の都市ロンドンを背景に、教育を受けて熟練工の世界から下層

中産階級に逃れた人間が直面する様々な障害とは何か？これを探りながら、ギッシングが伝統的なリアリズムに基づいて開拓した世紀末自然主義の新しい作風も同時に吟味したい。

(9) 成績評価の方法：

担当箇所の発表（30%）、質疑応答への参加（30%）、前期のレポート（40%）。

(10) 教科書、参考書等：

最初の授業で指定されたウェブ・サイトから電子テキストをダウンロードし、プリントアウトしたものを使うこと。

(11) 注意事項：

この授業にはメーリング・リスト (urban@lang.nagoya-u.ac.jp) がある。正当な理由があれば授業の欠席を許可するが、担当箇所は事前にメーリング・リストに流すこと。

(1) 講義名：ドラマ研究概論 b / 国際多元文化演習 b

(2) 副題：ドラマ / パフォーマンス研究入門

(3) 担当教員：村主幸一

(4) 開講時限：金曜 3 限

(5) 教室：北棟 107

(6) 目的・ねらい：

(ア) ドラマの特性を捉える能力を訓練する——現代人がフィクションに向かう姿勢は近代小説によって規定されているとする説があります。1970年代末に述べられた「文学の領域でも明治以降の日本では（中略）小説の特権的位置が当たり前になっていて、詩や戯曲は非常に狭いところに押し込められてきた」（『劇的言語』）という言葉が今も当てはまる状況があると感じています。近代小説と比べると、ドラマは確かに台本という形で文字テキストの要素をもちますが、他に役者（とその身体）、演技（またはパフォーマンス）、観客、舞台（物理的条件）などの重要な要素を含みます。これらは小説にはない要素です。その意味においてドラマは総合芸術であり、歴史的に見ても近代のメディアが登場する以前の時代においては、社会の重要なメディア・娯楽・儀式でありました。近代演劇の代表であるチェホフとイプセンの作品は文庫本で読めるものはわずか。この劣勢を跳ね返し、ドラマの特質と面白さを多くの人々に伝えたいと思っています。一つの演劇作品は通常短いものですので、作品を全体的に捉える訓練、細部（ディテール）を全体と関連付ける訓練としても適しています。対象のサイズは小さいけれども、多様な視点から思い巡らすことができるのがドラマなのです。

(イ) この世のものとは思えない言い回しが頻出する英語論文を読む力をつけるための

訓練をする（この読みの力は研究にとっても役立ちます）——英語ができるから英語論文が読んで理解できるかというとなかなか困難のようだと、これも学生諸君を見ていて思います。あなたはご自分のリサーチを日本語文献の範囲に、また母語文献の範囲に限定しようとしていますか。英語文献をリサーチしないでおいて、先行研究はないと豪語している学生も見かけます。とても残念だし、もったいないです。少し英語文献を覗いてみると、すぐに今まで知らなかった理論やアプローチが見つかることが多いからです。

(7) 履修条件等：

とくになし。

(8) 講義内容：

〔概要〕と〔授業方法および計画〕

(ア) について：1) 一学期に3つの演劇作品を取り上げディスカッションします。今学期はギリシア悲劇、シェイクスピア演劇、近代演劇から各々1つの作品（日本語訳）を選び、参加者にあらかじめ「質問文」を作成していただき、集まった「質問文」を土台にして議論します。2) 論文や研究書を輪読形式で議論の要点を捉えながら読み進めます。これは上記1)の作業をしないとき、すなわち回数としては最も多くなります。今学期は演劇論を扱った研究書（英語）をテキストとします。授業での課題は、当番を決め、その日に読み進んだテキストの要約（日本語）を作ってもらい、それを教員が加筆修正し、受講者全員にメール配布し、その日のテキストの内容理解を確認しながら進むという方法を取ります。3) ビデオ鑑賞。上記1)と2)以外のときに。1学期に1～2回。

(イ) について：そのねらいを、上記(ア)における2)の作業を通して追求します。

(9) 成績評価の方法：

授業への参加（課題・提出物を含む）(30%)と学期末レポート(70%)。

(10) 教科書、参考書等：

- ・3つの演劇作品（プリント、あるいは各自購入か図書館の本を利用）
- ・演劇論の研究書（プリント）

(11) 注意事項：

1) 前後期の両方を受講することを勧めます。

2) 後期では、取り上げる演劇作品が前期のものとは変わります。演劇論の研究書は前期の続きを読む予定です。

3) 前期に授業で配布した自家製『論文の手ほどき』を御入用な方には差し上げます。私の授業を受講しない人でも構いません。申し出てください。一応、国際言語文化研究科の学生に限らせていただきます。

(1) 講義名：ヨーロッパ文化芸術論 b

(2) 副題：モデルネ

(3) 担当教員：西川智之

(4) 開講時限：月曜3限

(5) 教室：文系総合館 522

(6) 目的・ねらい：

世紀転換期から20世紀初頭の文化・芸術の流れをたどることで、文化・芸術と社会の関係を考えるきっかけとしてほしい。

(7) 履修条件等：

前期授業ヨーロッパ文化芸術論 a から引き続き履修することが望ましい。

(8) 講義内容：

〔概要〕

19世紀後半から20世紀初頭にかけては、文学や美術・音楽などの文化・芸術の分野では様々な運動が起き、また科学・学問・思想の分野でもさまざまな発見がなされ、さまざまな考え方が提唱された。こうした世紀転換期から20世紀初頭（1930年ころ）までの文化・芸術、社会の動きをドイツ語でモデルネと呼ぶことがある。後期の授業では、20世紀初頭の美術運動を中心に、モデルネとは何だったのかを少し具体的に考えてみたい。

〔授業方法および計画〕

基本的には、与えられたテキストを丹念に読み進めることが授業の中心となる。毎回担当者を決め、その回のテキストについてレポート形式で解説を加えてもらう。

象徴主義、フォーヴィスム、表現主義、未来派、ダダイズム、シュルレアリスム、キュビズムなどの芸術運動について概観し、なぜこうした多様な芸術運動が生まれたのかを考えてみたい。

(9) 成績評価の方法：

担当箇所の発表（40%）、授業への参加（30%）、前期のレポート（30%）

(10) 教科書、参考書等：

『世界美術大全集第26巻 表現主義と社会派』（小学館）

『世界美術大全集第27巻 ダダとシュルレアリスム』（小学館）

(11) 注意事項：

特になし。

(1) 講義名：国際社会学演習 b

(2) 副題：グローバリゼーションとナショナリズム 2

(3) 担当教員：鶴巻泉子

(4) 開講時限：後期火曜 5 限

(5) 教室：文系総合館 623

(6) 目的・ねらい： ナショナリズムに関する講義と基礎的な文献精読を通じて、研究の大きな流れと視座や問題設定の違いを確認すると共に、従来の研究の分析枠組みを批判的に検討する新たな研究動向についても学ぶ。

(7) 履修条件等：前・後期を通した受講が望ましいが、半期の受講も可能。一般に民族・エスニシティ・移民問題、異文化・多文化の問題に関心を持った方の受講を歓迎する。ただし、講読文献は必ず読んだ上で出席し、かつ議論に積極的に参加することが受講条件となる。

(8) 講義内容：

〔概要〕

グローバル化と言われる現代、それに逆行するかに見えるナショナリズムに近年再び注目が集まっている。社会学、人類学、政治学、文化研究など様々な分野からの問題提起に目を向けつつ、理論的・実証的観点を通じて、現代においてナショナリズムが持つ意味やその背景を社会的に検討する。前期「国際社会学演習 a」では主に古典の講読を通じた基礎的理論、問題枠組みや方法論の確認、後期「国際社会学演習 b」ではグローバル化を背景とした現代におけるナショナリズムとその表出、意味や背景の分析に重点が置かれる。

〔授業方法及び計画〕

後期の授業では、グローバル化とそれを背景にした国民社会・国際社会の再編成に着目する。前期授業のように「ナショナリズム論」から出発するのではなく、個別のテーマ系・社会事象から出発し、そこから現代におけるナショナリズムとその理論的解釈の可能性を考える、という形をとる。テーマ系としては以下を考えている：拡大EU下のナショナリズム、領域的マイノリティとナショナリズム、国際移住とナショナリズム、新しい右翼急進主義とナショナリズム、メディア・ナショナリズム。数回の講義の後、参加者の専門と関心に応じて文献を選択し担当を決定する。

なお初回講義はガイダンスにあて、レジュメの作り方や文献・資料引用、ディスカッション・ポイントの提示などを説明する。

※この授業において「ナショナリズム」は日本語の「民族主義」という言葉が一般的に持つニュアンスとは全く異なった意味で用いられるので注意。以下の吉野耕作による「ナショナリズム」の定義を参考にされたい：「我々は他者とは異なる独自の歴史的、文化的特徴を持つ独自の共同体<ネイション>であるという集合的な信仰、さらにはそうした独自感と信仰を自治的な国家の枠組みで実現、推進する意思、感情、活動の総体」。

(9) 教科書、参考書等：文献リストを配布。

(10) 成績評価の方法：講読文献のレジュメ発表（50%）＋議論への積極的参加（50%）

(11) 注意事項：欠席の際には前もってメール（tsurumaki@nagoya-u.jp）・電話（052-789-4798）などでの連絡をお願いします。

(1) 講義名：近現代文化研究 b

(2) 副題：Play, Laughter and the Meaning of Life b

(3) 担当教員：Mark Weeks

(4) 開講時限：火曜3限

(5) 教室：北棟107

(6) 目的・ねらい：

The primary aim is to develop the ability to think vigorously, rigorously and with intellectual flexibility across various academic fields through an extensive exploration of related themes. Increasing cultural knowledge and fostering skills in the areas of academic discussion, reading and writing are further aims

(7) 履修条件等：無（近現代文化研究 a is not a prerequisite for this course）

(8) 講義内容：

Play is a foundational element of culture and essential to intellectual, scientific and artistic endeavor. Moreover, our attitudes to play and humor are deeply connected with our sense of purpose in life, along with our identities as individuals and societies. This course explores these relations and the important changes that have occurred in modern history leading into so-called “post-modern play” and the present period of globalization. While discussing sociology, psychology, literature, philosophy and film, especially from European and American cultures, classes will also draw on students’ own cultural knowledge and experiences.

The course will follow this sequence:

1. Existential absurdity and the tragi-comic in 20th Century literature/film
2. Play in 1960s counterculture: *One Flew Over the Cuckoo’s Nest*
3. Andy Warhol: work/play in art and philosophy
4. Poststructuralist philosophy and playful desire: Derrida and Baudrillard
5. Postmodern play and identities: Kundera, Delillo, *American Beauty*

6. Erotic play in the age of the Internet: from Otaku to global pornography
7. Humor in Japan: Osaka and the comedy boom
8. The functions of laughter and play amid globalization

(9) 成績評価の方法： 2 short papers (2 x 20%), a final research paper (40%), class participation (20%)

(10) 教科書： All materials will be provided by the instructor.

(11) 参考書等： A dictionary (electronic or book form) will be indispensable.

(12) 注意事項： 近現代文化研究 a is not a prerequisite for this course

ジェンダー論講座

(1) 講義名：ジェンダーとセクシュアリティ b

(2) 副題： Critical Theory

(3) 担当教員： 松下千雅子

(4) 開講時限： 火曜 2 時限

(5) 教室：

(6) 目的・ねらい：

ポスト構造主義理論を応用して日本のサブカルチャーを学術的に読み解く。

(7) 履修条件等：

英語でディスカッションができること

(8) 講義内容：

This course aims to offer critical insights into human sexuality expressed, viewed and constructed in Japanese subculture. Providing students with a critical overview of theory and research on gender and sexuality, especially from the first volume of Michel Foucault's History of Sexuality, it will introduce how to analyze "critically" and "academically" the desires and the pleasures that people might obtain from various sexual images.

(9) 成績評価の方法： 授業への貢献点 50%、期末レポート 50%。

(10) 教科書： 未定

(11) 参考書：

授業で適宜紹介する。

(12) 注意事項：

G30 との合併授業

(1) 講義名：ジェンダーと文学 B

(2) 副題： 日中のフェミニズム \ ジェンダー文学と事象

(3) 担当教員：星野幸代

(4) 開講時限：月曜 3 限

(5) 教室：北館 107

(6) 目的・ねらい：

①日中のフェミニズム\ジェンダー文学・映画批評を、読み、討論することによって、その批評史、傾向と様々な方向性、方法等を学ぶ。②日本・中国語圏の女性学・男性学に付随する問題を、映像資料をもとに討論し、理解を深める。

履修条件等：

(7) 中国語学習歴がなくても参加できるよう考慮します。

(8) 講義内容：

初回はガイダンス。教材について略紹／担当の仕方、レジュメの例／担当者を決める。

2、3、映画鑑賞（台湾映画『刺青』（予定））＋批評会

4、ポルノグラフィとエロティカ

5、ドメスティック・バイオレンス

6、日本の特撮番組とジェンダー

7～15回は、(10)で挙げるテキストのうち1、2章を選び担当者を決め、担当者は①該当する論文の論旨をまとめる。②論旨の上で重要な作家、作品、理論のうち補足が必要と判断したものについては、簡単な解説をつける。③自分の疑問点・意見、皆で議論したい点を提示。以上をレジュメにして配布した上で、40分前後で発表する。その後、参加者全員で討論する。

☆ これ以外でも、授業のテーマに合い、是非扱いたいテキストがあれば、それを自分の分担として発表しても構いません。

(9) 成績評価の方法：

第2回～6回については、興味関心のある映像資料1点について、討論の内容を加味しつつ批評レポートを提出。これが40%。7～15回において担当者になった人は発表で40%。（人数の関係から担当者になれなかった人は、7-15回の内容に関するレポートをもう1本提出）授業中の積極的な発言や討論への参加度を20%程度として、総合的に評価する。

(10) 教科書（順不同）

劉紀蕙『文化的視覚系統 □：帝國—亞洲—主體性』 2006

タニ・バーロウ他『モダンガールと植民的近代——東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』 2010

山出裕子『移動する女性たちの文学—多文化時代のジェンダーとエスニシティ』

2010

金井淑子『身体とアイデンティティ・トラブル——ジェンダー／セックスの二元論を超えて』 2008

(11) 参考書等：必要に応じて提示する。

(12) 注意事項：特になし。

(1) 講義名：ジェンダーと経済 b

(2) 副題：なし

(3) 担当教員：新井美佐子

(4) 開講時限：水曜 6 限（開講後、受講者と相談の上、変更の可能性あり）

(5) 教室：情言北棟 107

(6) 目的・ねらい：

・経済学あるいは経済事象にジェンダー視点から接近し、そこにおける問題点を理解する。

・文献の講読、レジュメ作成、ディスカッションへの参加を通じ、論文を書く、意見を交わすといった研究活動の基礎を修得する。

(7) 履修条件等：

経済学の知識を備えた上での受講が望ましいことは無論だが、必須ではない。「経済」とは、われわれの「日常生活」とも言い換え得る身近な活動であり、そこにおけるジェンダー問題とは誰しも無関係ではないはずである。受講者の希望（言語、難易度など）を可能な限り考慮して講読文献を決める予定なので、専門分野を問わず、また単位が不要であっても、関心や意欲のある学生の真摯な受講は大いに歓迎する。

(8) 講義内容：

経済学では、いわゆる主流派、非主流派の双方において、長らくジェンダー視点が欠落していた。このことを見直し、経済学やジェンダー研究の学問的発展につなげようとする動きが活発化したのは、1990 年代に入ってからに過ぎない。本演習では、女性研究者を中心に、学派の相違を越えて取り組まれているこうした試み - 「フェミニスト経済学」 - について、国内外の文献から学ぶ。

具体的には、前期開講の「同演習 a」における理論的研究文献の講読を受け、実証的研究文献を取り上げる。実証分析の対象 - 地域（国）、時期、等。つまり講読文献 - については、受講者の希望を考慮して決定する。

毎回の流れは以下の通り。

1. 報告者による講読文献のまとめ（要レジュメ）
2. 用語・内容等に関する質疑応答や解説
3. 報告者あるいは受講者が提示したディスカッション・ポイントについて議論

レジュメには、単に講読文献の抜書きを羅列するのではなく、講読文献の構成や内容が明瞭に捉えられるよう工夫を凝らして欲しい。またディスカッション・ポイントの提示に際しては、講読文献の内容を補足あるいは発展させるようなデータや文献、資料を添付するなどしても構わない（むしろ望ましい）。これらの作業は、テーマに関わらず、「論文を書く」 - 既存研究の不足点あるいは批判すべき点を見出し、問題として設定し、適切な方法と過不足なく明確な論述によって解を示す□ための訓練の一つとなろう。

さらに、教員あるいは受講者が参加した関連学会・研究会に関する報告なども適宜行い、最新の研究成果の紹介に努める。

「経済」という語がカバーする範囲はいうまでもなく非常に広く、特にジェンダーとの関わりが深いと考えられる分野に限っても、労働、子育て・介護をはじめとする社会的再生産、社会保障、あるいはグローバルな経済システム等、多様である。本演習でこれら全てについて検討することは無論不可能であるが、上記のような様々な経済領域が密接に関わりあっているということを常に念頭に置き、広い視野でジェンダーを理解するよう心掛けて頂きたい。なお、本演習を通じて、ジェンダー研究が、女性（とりわけ、いわゆる「働く女性」）のみの利益を追求・主張するものでは決してないことが理解されると思う。

(9) 成績評価の方法：

毎回のディスカッションへの参加度（50%）、ならびに報告担当時のレジュメ/ディスカッション・ポイントの内容（50%）。

(10) 教科書：演習中に指示する。

(11) 参考書等：演習中に適宜紹介する。

(12) 注意事項：

・前期開講の「ジェンダーと経済 a」から継続受講することで上記「(4)目的・ねらい」がより達成されると思われる。

・欠席する際には、メール等にて極力事前連絡のこと。